

普通期水稲田植から中干し前後管理情報

～田植後管理の徹底により丈夫な稲を作ろう！～

本年も、昨年同様に雨量が少なめの予報となっています。雨が多い年は、いもち病等の発生が多くなり、雨が少ない年は、ウンカ等害虫、雑草の発生が多くなります。気象によって変化しますので対策をお願いします。

1. 田植後の管理

(1) 水管理

- ② 活着促進のため田植後2日間は深水管理に努める。
- ② ジャンボタニシ多発田では浅水管理を行い、絶対に干しあげない!
- ③ 田植後3日頃、除草剤散布前に、土中の有害ガス抜きも兼ねて3日間程度軽く落水する。その後は間断灌水（灌水4日、落水3日）を繰り返す。

(2) 除草剤散布（水稲暦参照）

初中期除草剤を使用する場合は、基本は深水で散布し、最低でも田面が見えない程度の水を溜めておく。また、散布後7日間は落水させない。初中期除草剤散布後、雑草が生えてくる場合は中期除草剤を散布する。（落水が早いと効果も早く切れます。）

(3) 病虫害対策

- ① いもち病・・・曇雨天や低温が続く場合は十分注意すること！
田植後に余った苗（置き苗）が第一の発生源になるため、植えつぎが済んだら置き苗は早急に除去する。また、育苗期間中にいもち病が発生していた場合は、葉いもちに十分注意する。
◎いもち病本田防除薬剤
・ノンプラスフロアブル 1,000 倍液（2 回以内 収穫 7 日前まで）
・ブラシンフロアブル 1,000 倍液（2 回以内 収穫 7 日前まで）

(4) ケイ酸加里の施用

出穂45日前（中干し開始頃）を目安にケイ酸加里30kg/反を必ず施用する。

ケイ酸加里の施用により病虫害や夏場の高温に負けない丈夫な稲体になる。昨年のような夏場に高温が続く場合でも、稲体自体の温度を下げる効果や、気温が低く日照時間が少ない条件下でも、光合成能力の向上により十分な養分を生成し蓄えることができる。

登熟向上のために必ず施用しましょう!!

2. 中干し時期・方法（最重要）

（1）中干しの重要性

中干しは稲作りにおいて最も重要な基本技術。中干しが出来ていない田んぼで高品質・高収量は目指せない。中干しの重要性をしっかりと認識し確実に実施することで、中干し後の管理が適切に行える。

（2）中干しの効果

- ① 剩分けつの抑制 ② 土中の有害ガスの抑制 ③ 根を深く張らせる（根量増加）
- ④ 追肥が十分できるよう余分な窒素抑制 ⑤ 幼穂形成期の均一化（穂揃いを良くする）

（3）1株分けつ本数が平均16～18本になったら開始する。（完全落水、排水栓抜き実施）

（4）時期の目安・方法（6月15日田植えを基準）

- ① 夢つくし=7月15日頃から ヒノヒカリ=7月20日頃から行う。
- ② 約7～10日間実施し、少しヒビが入る程度に行う。
- ③ 田んぼが白乾状態になった場合は、中干し中でも走水を行う。
- ④ 砂地は、一度に強めに行わず、数回に分けて行う。

農薬散布は基準を守り、周辺作物への飛散に注意する！！

農作業事故には十分注意して作業を行うこと！！

栽培履歴の適正記帳・収穫前の提出を必ず行いましょう！！

問い合わせ 農畜産課 327-3912